

今日は同じ日に書き続けることにした。だから(その二)である。さる一日に書いたのが消えてしまった。仕方がないのもう一度書く。わたしは下書きも嫌い、推敲も嫌い。同じ文章を書いたことはまず一度もない。でもさる一日に書いたのは記録的な内容だった。なるだけ忠実になぞろう。

一月二十五日に幸多朗が通う茨木市立彩都西小に、高校同期生の金山正吾さんらの作る土木技術集団C.V.V.の皆さん十一人が、総合学習の指導に来て下さったことは書いた。その続きである。「紙飛行機で遊ぼう会」というあの日の課外学習は大成功であった。受けた一年児童も先生方も指導のC.V.V.の皆さんも誰もが喜び、感激した。C.V.V.の一人で、当日参加下さった酒井豊さんという方は、C.V.V.のHPに「一年生がめっちゃ賢く、可愛く、感激した」との報告をされた。もうめちゃ嬉しいではないか!!

校長先生にC.V.V.の素晴らしさをお手紙で紹介したのはわたしだった。現役の際は異なる二つの社会資源をコーディネートするのがわたしのやり方だった。それは華々しいスクープとは縁遠い取材だったが、たとえ些少なことであれ、無から有を造り出すことには違いなく、取材先との信頼をその後のさらなるコーディネートに繋げるのも私流のやり方だった。

だから、三十一日の朝日新聞に、C.V.V.と彩都西小の総合学習の実際を紹介する文章を投稿した。彩都の子供たちが楽しむだけでは困る。茨木に住む多くの子供たちにも「紙飛行機で遊ぼう会」のような体験をして欲しい。さらにはC.V.V.の名を広めることによつて「我々も何かやろうじやあないか」とボランティアを買って出てくる人々が現れるなら、こんなに素晴らしいことはない。団塊世代への刺激にもなる。もし朝日に取り上げてくれるなら、近頃、とろい。あの新聞を再評価も出

来る。そんなもろもの願いを込めて投稿した。FAXで送るらしいから送信したが、さて。

投稿後になんと金山さんから「C.V.V.に入会しませんか?理系の人以外でもメンバーがいます。特に女性が歓迎です」とのメールが来た。ジャストタイミング。こんなのをあ・うんの呼吸と云うのだろう。しかし、金山さんもかなり速い。亥生まれか?いいお誘いだ。上記に書くように、わたしの役目は「黒子」である。C.V.V.にも今後あれこれ部外者の声として聞いてもらいたい。ここは会員にならせてもらう光栄を辞退して、いやもう痛くて新しい組織に組する気力もないのだが、野次馬に徹するのだ。

率直にお断りのメールを入れたら、すぐに理解してもらえた。朝日への投稿文も転送した。彼とはきつとこれからも良きタッグを組めそうな気がする。高校同期生で在学中に親しかったのはほんの一にぎり。MLがなかったら、金山さんとも接点は生まれなかった。メール時代の友人の作り方はドライな気もするが、きのうの他人は今日の友だから凄いな。ただ顔を見れない関係は波乱含みであることも事実。甘え過ぎず、遠慮し過ぎず、賢く行かなければ……。金山さん、よろしくやりますようねえ。C.V.V.の皆さんもよろしく願っています。

ピアフ歌ひ封印溶けゆく如月かな